

関野貞関係資料

はじめに 奈良文化財研究所は、明治・大正時代の建築史学者である関野貞（1868年～1935年）の関係資料を所蔵している。本資料はご子息の関野克氏より、2000年1月に寄贈を受けたものである。現在、歴史研究室が整理をおこなっており、まだ整理中ではあるが、その内実がほぼ判明したので、ここに報告する。

関野は明治元年（1868）生まれ。東京帝国大学工科大学造家学科で建築学を学び、明治28年（1895）に卒業。明治29年12月に古社寺修理工事監督・古社寺保存委員として奈良に赴任し、明治30年6月には奈良県技師に任命されている。奈良赴任中には、奈良とその周辺の古建築・古美術、さらには平城京など、文化財全般に関して精力的に調査に出向いている。明治34年2月に東京帝国大学工科大学助教授に任じられ、東京に戻る。東京帝国大学時代には、奈良赴任時代の知見を生かし、「法隆寺金堂・塔婆及中門非再建論」（明治38年）・「平城京及大内裏考」（明治40年）など、重要な論考を多く執筆している。その一方、朝鮮・中国にもしばしば足を運び、朝鮮・中国の建築・美術史に対する造詣を深めていく。昭和3年（1928）に東京帝国大学を定年退官し、昭和10年に69歳で逝去している¹⁾。

内容 表6に掲げたように、奈文研所蔵の資料はおおむね、日記・調査野帳・図面類・稿本・史料類・その他に分類できる。関野の広汎な調査・研究活動の中でも、特に奈良に関係する資料が多くを占めている。

若干の解説を加えておく。日記に関しては、「世路のしほり 明治30・31年」は明治30年9月1日から明治31年12月29日にかけての関野の日記で、野紙に書き付けた日誌を紙綴で綴じ、共紙表紙に「世路之志保里」と外題を書いている。1字目は字形からは「卅」とも読めるので、従来は「卅路之志保里」と読まれてきた。しかし明治24・25年の日記外題には「世路之栞」とあるので²⁾、本日記も「世」と読むのが適当だろう。明治32年以降の日記は、市販の日記帳に書き付けたものである。関野が奈良に赴任していた明治30年から明治34年のうち、明治33年以外の日記が現在奈文研にあることになる。

調査野帳は、縦19cm・横29cm程度の画用紙を紙綴で綴

じたもの。現状では紙綴が外れているものもある。また、現状とは別の綴じ穴を有する画用紙が多く、何度か綴じ直されているようである。内容は、古建築や古美術のスケッチ・その所見のメモなどである。調査の時に持ち歩いて書き付け、後に画用紙で綴じたのだろう。調査年次を示す記述はないが、奈良周辺の古社寺がほとんどであり、大部分が奈良赴任時の調書と思われる。

図面類は、浄書された図面と、調査・考察過程における書き付けに類するものとが存在する。平城京研究関係と、奈良の寺院に関わるものとがほとんどを占める。「平城京及大内裏考」挿図の原図も含まれている。

稿本は、寺社の調書を冊子にまとめたものと、論文の原稿とが存在する。前者に相当するのが、「奈良県下有名寺院沿革略」「京都府四百年以上社寺沿革略」「京都府下四百年前社寺建物調書」である。後者、論文の原稿は、罫紙に墨書して漢字片仮名混じり文で記すものが多い。抹消・語句の挿入・別紙原稿の貼り足しなどが多くあり、推敲過程をうかがうことができる。

史料類は、近世のものと明治時代のものとが存在するが、いずれも写本である。

特記事項 この中で、特に平城京研究に関連していくつか気がついた点を述べたい。まず「平城宮現況図」について（図34・巻頭図版2）。この図は縦83.2cm横55.2cm、東張り出し部を除く平城宮全域の測量図で、縮尺は2000分の1である。大字界・小字界・道路を記し、さらに土地を地目（「池溝」「草生藪雑木堤」「田」「畑」「宅地」）ごとに区分し、それぞれ色分けしている。

関野が作成した平城宮の地図で従来知られているものには、明治40年出版の「平城京及大内裏考」所載の巻末第四図がある³⁾。この巻末図も「平城宮現況図」同様、縮尺は2000分の1である。しかし巻末図は田地一筆ごとの畦畔まで書き込み、宮域断面図を掲げており、より詳細な地図に仕上がっている。ただ、巻末図は平城宮北部の、現佐紀町の集落付近は一切描かれておらず、空白のままとなっている。一方「平城宮現況図」は、全体的には巻末図よりも簡略だが、佐紀町集落付近の田・畑・宅地が入り組んだ地目も含めて、宮の全域を記録する。

また巻末図と「平城宮現況図」とでは、朝堂院の復原形態も少し相違する。巻末図は平安宮同様、竜尾壇上の東西に東楼・西楼を置き、竜尾壇上の朝堂院回廊を凸字

表6 関野貞関係資料目録

資料名	頁数 注	資料名	頁数 注	資料名	頁数 注
日記		図書類		京都府下四百年前社寺建物	
世路のしほり 明治30・31年	1冊*1	平城宮現況図	1 鋪	調書	1 冊
関野貞日記 明治32年	1 冊	平城宮北辺地域図	1 鋪	「平城京及大内裏考」原稿	4 冊
関野貞日記 明治34年	1 冊	平城京条坊図	1 鋪	「平城京遺址考」原稿	1 冊*10
関野貞日記 明治35年	1 冊	平城京距離測定図	1 鋪	「平城京遺址考」草稿断簡	1 冊*11
関野貞日記 明治38年	1 冊	大和国班田略図写	1 鋪*4	「寧楽時代」原稿	1 冊*12
調査野帳		平城京周辺条里・条坊復原図	1 鋪	尺度・法隆寺関係原稿	1 冊
調査野帳 法隆寺	1 冊	条里方眼図	1 鋪	寺院関係原稿	1 冊*13
調査野帳 法輪寺	1 冊	額田寺伽藍並条里図写	1 鋪*5	史料類	
調査野帳 法華寺・興福寺		寛永11年額安寺境内図写	1 鋪	興福寺由来記	1 冊
・春日神社・松尾寺	1 冊	近世額安寺境内図写	1 鋪	諸寺縁起集	1 冊
調査野帳 東大寺・新薬師寺	1 冊	近世額安寺境内図写	1 鋪	大和国内山陵図	1 冊
調査野帳 薬師寺・唐招提寺		大和国添下郡京北班田図写	1 鋪*6	諸門跡系譜	1 冊
・栄山寺・当麻寺	1 冊	平城京右京図写	1 鋪*7	上宮聖徳法皇帝説	1 冊
調査野帳 海龍王寺・極楽院		西大寺往古敷地図写	1 鋪*8	招提千歳伝	5 冊
・円成寺・諸社寺	1 冊	西大寺伽藍絵図写	1 鋪*9	東大寺大仏殿沿革紀要	1 冊
調査野帳 千寿院・南法花寺		西大寺周辺小字図	1 鋪	大和志料	3 冊
・世尊寺・金峰山寺・吉		西大寺四至図	1 鋪	その他	
水神社・水分神社・長谷		薬師寺現況図	1 鋪	続日本紀等抜粋	1 冊
寺・聖林寺・文殊院・山		「平城京及大内裏考」挿図原		史書抜書	1 冊
辺郡	1 冊*2	図	計11鋪	雑記帳	1 冊
調査野帳 吉野	1 冊	唐大明宮図	1 鋪	メモ帳	2 冊
調査野帳 室生寺・観心寺	1 冊	長安宮城平面図	1 鋪	北畠治房質問状	1 冊
調査野帳 京都府・滋賀県	1 冊	稿本		密教曼陀羅	1 鋪
調査野帳 香取神社	1 冊	奈良県下有名寺院沿革略	1 冊		
調査野帳 周代模様	1 冊	京都府四百年以上社寺沿革略	1 冊		
調査野帳 絵師家系図	1 冊*3				

(備考) 他に断簡・論文抜刷などあり。

(注)*1 明治30年9月1日～明治31年12月29日の日記。

*2 金峰山寺・吉水神社・水分神社は外題には見えるが、該当の記述なし。「調査野帳 吉野」にまとめ直されたものと思われる。

*3 他に「額安寺／博物館／興福寺」の上書きを有する表紙あり。中身は他の野帳にまとめ直されたものと思われる。

*4 北浦定政作成絵図の写し。

*5 現国立歴史民族博物館所蔵絵図の写し。

*6～*8 現東京大学文学部所蔵絵図の写し。

*9 現西大寺所蔵元禄11年作成絵図の写し。

*10 中欠。

*11 他に「平城京大極殿址跡考」の表紙のみあり。

*12 論文「日本建築史」第4章「奈良時代」の基原稿。

*13 主に寺院関係の原稿類をファイルに綴じたもの。

形に復原する。一方「平城宮現況図」では櫓を置かず、朝堂院を単純な長方形に復原している。

この2つの復原案については、「平城宮現況図」が古く、巻末図が新しいと考えられる。なぜならば、平城宮について初めて公表した論文である、明治33年の「平城宮大極殿遺址考」には、「平城宮現況図」と同様の形に復原された朝堂院の図が掲載されているからである。また「平城宮現況図」は宮城の範囲を示すのみにて宮城十二門を復原していないのも、こちらの方がより古い時期に製図されたことを示すだろう。

関野が塚本松治郎（慶尚）の助力を得て平城京研究を開始したのは、明治31年11月12日のことだった。彼は翌明治32年1月21日に初めて平城宮跡を訪れ、その保存状態の良さに感動して、早速その月から2月13日にかけて

平城宮跡を測量させている⁵⁾。巻末図はこの時の測量に基づくものである。これらの点を勘案すると、明治32年の測量後程なくして製図したのが「平城宮現況図」で、その後畦畔なども加えて製図したのが巻末図と考えられる。ともかく、整備される以前の平城宮跡を記録する地図として、貴重なものである。

次に「平城宮北辺地域図」について（図35）。この図は縦32.7cm横24.4cm。通称一条通り以北、歌姫越え（「京海道」とあり）の街道の東西を描いている。それは平城宮の北部から北側にあたる。この図は見取り図で、道路の形状など正確でない部分もあるが、旧字名や、道路・古墳、「旧土堤形及現在」などを書き込んでいる。この絵図からはまずは、旧字名として「本堂畑」「東坊」など超昇寺関係の地名を拾っていることが目につく。そし

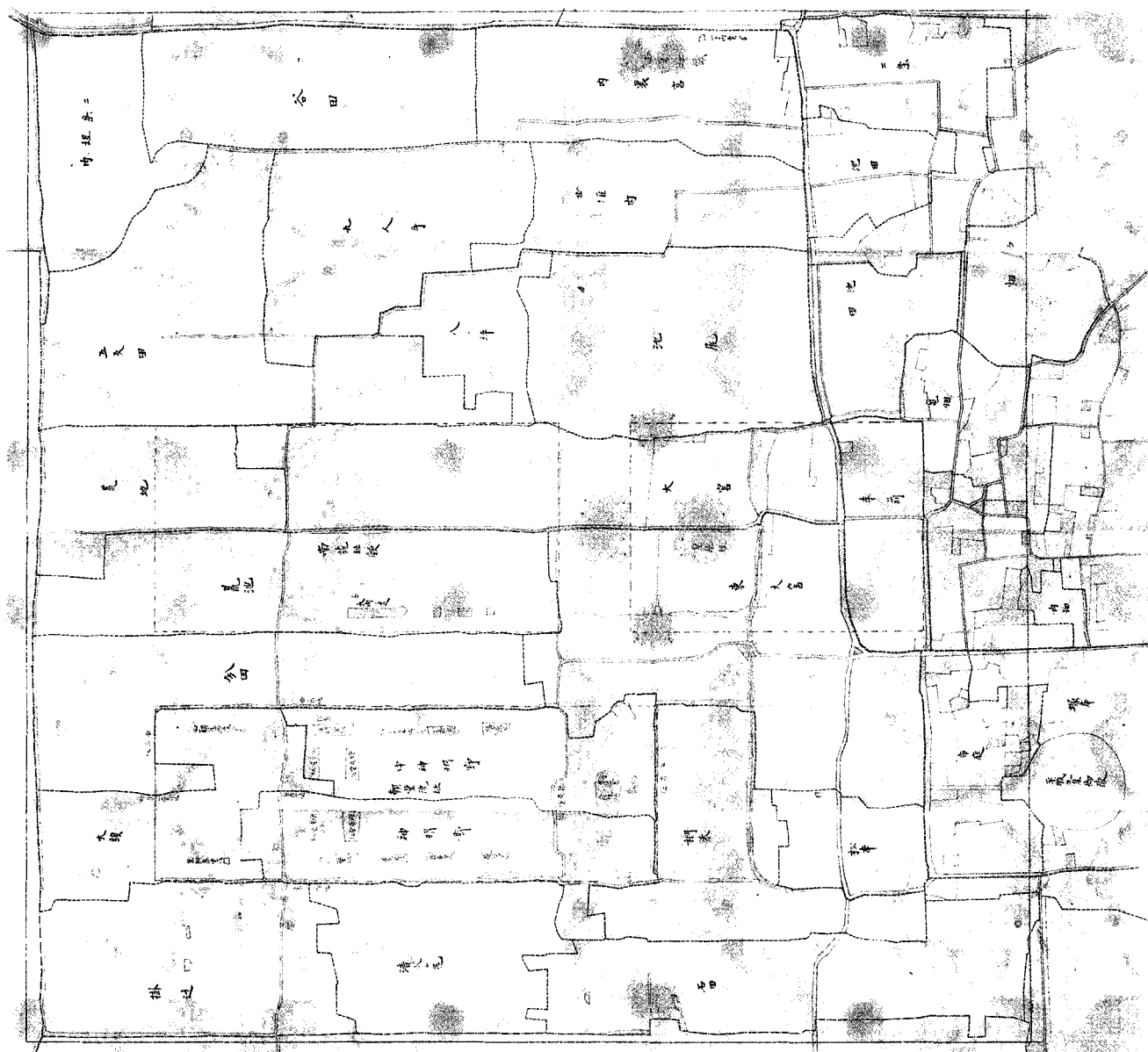


図34 平城宮現況図（右が北）

てさらに注目されるのが、現存土塁の記載である。それを見ると地図南部には、平城宮北面大垣が、平城天皇陵の東西にのびる土塁として描かれている。また地図北部にも多くの土塁がある。このうち、猫塚古墳の南側を東西に走り、「基点」とある地点で北折して、瓢箪山古墳（「壺山」とあり）と塩塚古墳の間を南北に走る土塁は、現在、松林苑の南面・西面築地と想定されている遺構である。⁷⁾ また、歌姫越え（「京海道」）の西側道路沿いに南北にのびる土塁を描いているが、これは橿原考古学研究所の松林苑第40次調査によって検出された、推定大蔵省東面築地⁸⁾に当たるはずである。

このような記載内容に対応する記述が、「平城京及大内裏考」第1編第3章第3節「北辺」項に存在する。引用すると、まず「北一条大路より班田制にて二町北に当り、恰も小道の東西に亘りて門の外と寺畑と曰へる地の界をなし、昔時何等かの界線たりしがごとき形迹あり」

とあるのは、上述した松林苑南面築地を指す。また「小道の北、寺畑及衛門戸畑と称する所は、昔時別に一廓をなせしが如き形迹あれども、何の遺址なるやを知らず」とあるのは、絵図と見較べれば、松林苑を指していることが判明する。関野は「何の遺址なるやを知らず」という評価ではあるが、松林苑とその周辺の遺構を、遺存地形から明確に認識していたのである。

関連する問題として、北辺の理解に関して指摘しておく。関野は当初は平城京に北辺の存在を認めていなかったが、その後、西大寺の北方に北辺が存在した事実より、北辺の存在を認めるに至った。しかし喜田貞吉の反論を受けて再検討した結果、条里制成立の後に平城京が建設されたとの理解に至り、「北辺説を排斥」したという⁹⁾。彼がこの理解に至ったのは、明治38年12月4日のことである（「関野貞日記 明治38年」）。最終案に基づく「平城京及大内裏考」は同年同月、つまりその直後に脱稿してい

